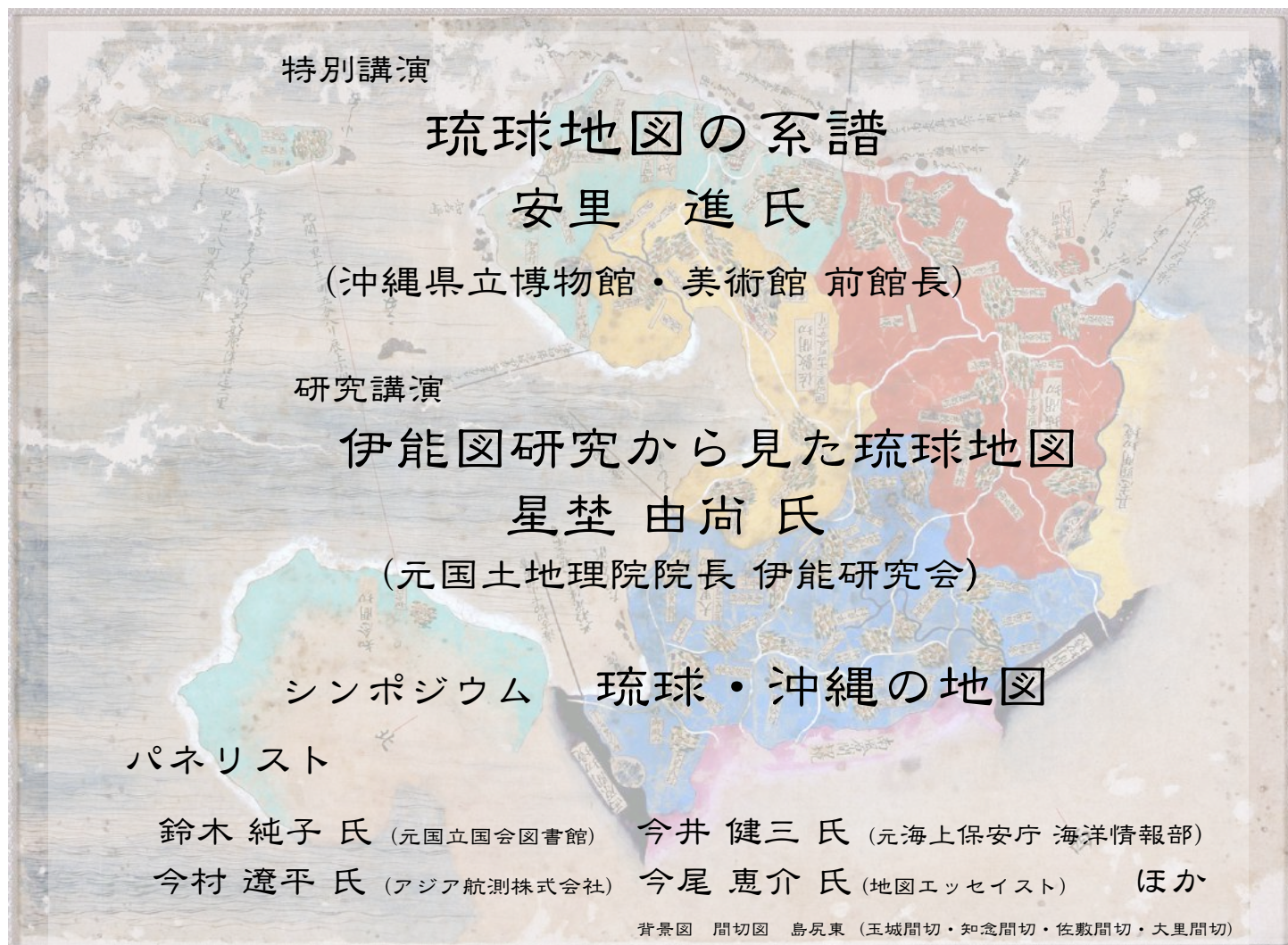


日本地図学会・沖縄県立博物館美術館 共催

琉球の地図

講演・シンポジウム

(平成29年度 日本地図学会 地方大会)



特別講演

琉球地図の系譜
安里 進氏
(沖縄県立博物館・美術館 前館長)

研究講演

伊能図研究から見た琉球地図
星 埜 由 尚 氏
(元国土地理院院長 伊能研究会)

シンポジウム 琉球・沖縄の地図

パネリスト

鈴木 純子 氏 (元国立国会図書館) 今井 健三 氏 (元海上保安庁 海洋情報部)
今村 遼平 氏 (アジア航測株式会社) 今尾 恵介 氏 (地図エッセイスト) ほか

背景図 間切図 島尻東 (玉城間切・知念間切・佐敷間切・大里間切)

日時：平成29年2月5日(日) 午後1時から4時30分まで

会場：沖縄県立博物館・美術館 ホール

定員200名 資料代 1,000円 (学生・60歳以上は無料)



日本地図学会

沖縄県立博物館・美術館
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum

特別講演

琉球地図の系譜

安里 進氏 (沖縄県立博物館・美術館 前館長)

1947年沖縄県那覇市首里生まれ。琉球大学法文学部史学科卒業。大阪府教育委員会、浦添市文化部長、沖縄県立芸術大学教授などを経て、2013年より沖縄県立博物館・美術館館長。2016年3月、同館を退職。専攻は考古学・琉球史。おもな著書に『沖縄人はどこから来たか—琉球・沖縄人の起源と成立』（共著、ポードアインク刊）、『琉球の王権とグスク』（山川出版社）など。

琉球を描いた編集地図「琉球国之図」は、日本の姿を明らかにした伊能忠敬の全国図の完成(1821年)に先駆けること約80年、1737年から始まった琉球の測量(乾隆検地)に始まる。講演では当時の技術や時代背景について迫る。琉球政府が17世紀フランスで三角点を利用した測量技術を受領した経緯、そのルーツとなる18世紀初めに清朝(中国)の康熙帝がフランスから測量士を呼び、世界初の国家的測量をしたことなどを解説する。その技術がいかにして琉球にもたらされ、先進的で精度の高い地図が作られた背景を探る。

当時、首里王府が人々に平等に土地を配分する必要性などから、正確な地図が必要となった。その時、用いられた琉球の測量技術が、今の三角点にあたる印部(しるび)石と間切単位で測量する方法であった。印部石は琉球で約1万個設置され、恒久的で王国が滅びるまで使われていた。当時このような測量方法は世界のどこにもなかったと推察される。さらに、その技術は琉球風に独自にアレンジされ、琉球の正確な地図作成に生かされた。正確な地図作り事業はその先見性や計画性、構想力がなければできない。独立国家「琉球」を背負う先人の気概と実行力が感じられる地図作成大事業であった。

研究講演

伊能図研究から見た琉球図

星 楚 由 尚 氏 (元国土交通省国土地理院長、伊能研究会特別顧問)

1946年東京生まれ。東京大学理学部(地理学)卒業後、同大学理学系研究科博士課程満期退学。建設省国土地理院長退官後、日本地図センター専務理事、地図協会理事長等を歴任。伊能忠敬研究会特別顧問。専門は、地理学、地図学。著書に『伊能忠敬』（山川出版社）ほかがある。

19世紀初頭に伊能忠敬が作成した「大日本沿海輿地全図」は、日本の地図史上初めての科学的な実測による日本図であると評価されてきた。江戸幕府により調製された国絵図とそれに基づく日本総図も何らかの形で測量が行われて調製・編集されたものと考えられるが、組織的な同一技術者集団により科学的な基準に則り統一的に全国を巡って測量したのは伊能忠敬が史上初めてである。伊能図は近代測量の時代となっても影響を与えた。一方、同時代の琉球では、フランス—中国由来と考えられる三角法による検地測量を行い、さらにその成果から編集した「琉球国之図」が伊能測量以前に作成されていた。伊能測量の手法と比較し、伊能図と「琉球国之図」の表現内容を比較することにより、我が国の地図史における「琉球国之図」の意義を述べてみたい。

シンポジウムパネリスト

鈴木 純子 氏 (元国立国会図書館) 今井 健三 氏 (元海上保安庁海洋情報部、評議員)

今村 遼平 氏 (アジア航測株式会社) 今尾 恵介 氏 (地図エッセイスト、地図学会評議員)

興那覇 里子 氏 (沖縄タイム社 記者)

司会 進行

太田 弘 (慶應義塾普通部・慶應義塾大学教養研究センター、日本地図学会評議員、同集会委員)

旧日本海軍(水路部)が作成した明治の琉球の旧版「海図」の特別展示があります。



明治7年5月 大日本海軍水路寮刊行 縮尺 1:26,457

明治6年夏 測量(測量艦の記載なし)

図積: 43.6×52cm (横長)

水深の単位は 尋・フアヅム (1尋=約1.818メートル)

干満差: 2.12メートル、磁針偏差: 2度16分 西偏

測量者: 海軍大佐柳権悦、大尉中村雄飛、中尉大伴兼行

製図: 水路寮出仕 狩野應信、銅板彫刻: 松田龍山

特徴: 全体の様式は英国海軍海図に準じ、欧文記事は英国海図から採用と思われる。首里城略記が記載、地形はケバ式表現、さんご礁、塩田、市街地の表現が詳しい。港の入り口には唐船口と宮古口の2つの航路名が表記、対景図2図が描画、尾根の広葉樹と針葉樹の区別を詳しく表現している。

(海上保安庁所蔵)

第19号 「大琉球那覇港之圖」

協力: 海上保安庁海洋情報部、一般財団法人 日本水路協会 (英文名称: Japan Hydrographic Association)